

[発行日]=2000年2月15日

[本文]

ルシアと名付けたプロジェクトに取り掛かっている。

日本でも、サンタ・ルチアという歌は、大抵の人が知っているはずである。

ルシアは、たしかイタリアの人だったと思うが、それがなぜ、遠く離れたスウェーデンで、光の神様として崇(あが)められているのか。絵画の先生のリキヤルドの説では、彼女は美しく敬虔(けいけん)なクリスチャンで、異教徒の求婚を退けるために、自ら両眼をつぶしたという。

十二月に国を挙げて、ルシア祭が催される。ノーベル賞の受賞者が泊まったホテルにも、早朝、ドアをノックする者がいて、こんな時間に何事だろうとドアを開けたら、純白のローブを着た若い娘たちが、ろうそくの灯をともした冠をかぶり、サンタ・ルシアを歌っている。ドイツのギュンターグラスが、文学賞を受賞したが、彼も早朝のうれしい訪問に、目を丸くしたことだろう。

我がコーラスクラブでも、投票でルシアを選び、猛特訓して、ルシア祭の当日は、全校生の待ち受ける電気を消した大きな部屋に、ろうそくを灯(とも)し、歌いながら入っていき、いくつかの宗教歌を歌った。

私は、クラブのみんなが出し合って買ってくれた白いローブに身を包み、円錐状(えんすいじょう)のとんがり帽子をかぶり、星のついた棒とろうそくを手に持って参加した。厚紙で作った大きな星の裏側には、短い詩(スウェーデン語)を書きつけておいた。実は、一人で朗読する場面があり、毎晩のように練習して暗記したのだが、うまく言えるかどうか心配だったのである。後で、いろいろな人に、朗読のことで「イエッテ・ブロー(よくできた)」とほめられた。

街でも、あちこちの学校などで選ばれた美しい少女たちが、おそろいの雪のように白いコートを着て、賛美歌を歌って歩く。

ついつい脱線してしまったが、午後三時ごろには陽(ひ)が沈んでしまう長い冬の始まりに、光の神様の祭りがあるということが、ひと冬越してみても、切実なものとして納得できるようになった。

プロジェクト・ルシアは、暗く長い夜に浮上してきた。

土で出来たパイプのような物が連結され、波のようにうねる。波が、織物のように組み合わされる。土のボディーは限りなく薄く、無数の小さな穴があり、その表面にカラフルな釉薬(ゆうやく)の膜がある。

うねるパイプラインの内側を光が走る。薄い胎土を透かして、色とりどりの光の波が打ち寄せる。ヒッピーヒルと呼ばれる、この広大な丘のすべてを、光の波で埋め尽くし

たい。暗い夜に、丘の上に、カラフルな光の海が出現する。

頭の中で、アイデアは無限に展開する。しかし、このプロジェクトの実現は、夢のまた夢である。今はまだ、とりとめのない空想に近い。五月までに実現可能な構想を模索している。ますます、不眠の夜が増すばかりである。

《注》ヒッピーヒル=生徒の中には髪の長い者も多く、街の人は学校のある丘を、そう呼んでいる。